文化財だより

第 33 号

令和３年３月

発行　真鶴町教育委員会

特集　貴船神社の船祭りを中心に

～真鶴町の祭りをみる～

毎年、七月二十七、二十八日の両日に開催される「貴船神社の船祭り（通称　貴船まつり）」は、真鶴町を代表する祭りであり、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。毎年、多くの見物客でにぎわう、この貴船まつりは、町の最大イベントでもあり、開催に向けて、二か月も前から多くの保存会等の団体の人たちによって準備されていきます。

この貴船まつりでは、海上渡御を行う神輿を始め、その華やかな音色が魅力の真鶴囃子、そして絢爛豪華な花飾りと船の周囲に飾られた提灯が灯されて夜の海に浮かぶ姿の美しさが、見物客を魅了してやまない東西小早船。その小早船を曳行する東西の櫂伝馬とそれを操る花漕ぎの人たち。まつりは、これに始まり、これで終わると言われ、まつりの間、独特の節回しによる唄と踊りで町内の角々で踊られる鹿島踊り。これらの全てが融合して貴船まつりは成り立っています。

この貴船まつりは、古くからの真鶴の基幹産業である漁業、石材業、海運業、商業が結びついて、長い年月を経ながら、町民の中で支えられ、今日まで続いてきました。

この貴船まつりを、これからも継承していくべく、今回は特集いたします。またそれ以外にも、町の重要伝統文化行事に指定されたまつりも紹介いたします。

海上に浮かぶ西小早船

目　次

特集　貴船神社の船祭り
～真鶴町の祭りをみる～
小早船、軍船から御座船へ
文化財審議委員会委員　三木　宏　……2
貴船まつり小早船
組立図作成について
有限会社　伊藤平左ェ門建築事務所
取締役社長　井上　説子　……3
貴船まつりの各行事の現状
真鶴町教育委員会　主査　新井　人志　……4
真鶴町
重要伝統文化行事の紹介　……7
真鶴町民俗資料館の紹介　……8
令和二年度文化財保護事業　……8

小早船、軍船から御座船へ

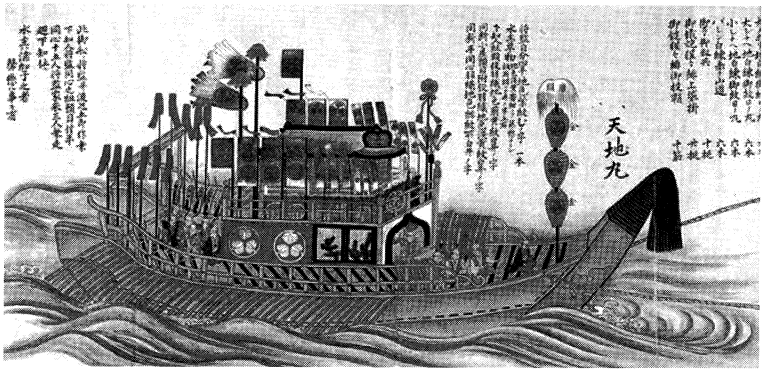
三木　宏（町文化財審議委員会委員）

全世界が感染症パンデミックで激動した令和二年も、天地の恵みは変わらず注がれて新たな年を迎えた。コロナ禍の中、オリンピックをはじめ祭りやイベントが各地で中止となったが、やはり貴船祭りの中止には寂しさを感じる。令和二年に屋形の修繕を終えた西の小早船が、華麗な姿を披露するはずであった。令和三年の夏には東の小早船が、同じく屋形の修繕を終え披露される予定である。船祭りの中心をなす小早船の存在は、まさに祭りの華ともいえる。

小早船は本来、軍船であった。慶長十四（一六〇四）年徳川幕府による諸大名の安宅船所有禁止の後は、軍船の主力は五〇〇石積みを限度とする戦闘力の弱い関船に移った。関船は早船の別称を持つように、特に速力を重視して、先鋭な船首と安宅船よりはるかに細長い船型を持っていた。関船より更に小ぶりで軽快な軍船が小早船である。安宅船を戦艦、関船を戦闘巡洋艦とするなら、小早船は軽巡洋艦、高速巡洋艦ともいえる。ちなみに、貴船祭りで小早船を曳航する櫂伝馬も、かつては軍船として使用されたものである。江戸初期、各藩は関船の維持すら費用がかさんで困難であったため、小早船が正規軍船の多くを占めた。小早船は快速で平日の警察任務に適していた。

一方、天下泰平の時代、鮮やかな漆塗りで仕上げられ、様々な金具で装飾した豪華な屋形を設けた「御座船」が登場した。戦国時代には軍船として活躍したが、徳川時代からは、豪華船としてお召し船に利用された。図は徳川幕府の「天地丸」である。

船種は関船であるが、貴船祭りの小早船に酷似している。



『将軍乗船図』に描かれた天地丸（東京国立博物館蔵）

天地丸は嘉永七（一六三〇）年、三代将軍家光の時代に建造され、廃船に至る幕末までの実に二三〇年以上の間、将軍の御座船の地位にあった。五〇〇石積み、七六挺立で将軍の御座船にふさわしい華麗な外観をしていた。

ちなみに軍船である小早船は泰平の世の中で次第に軍船的要素を失ってゆき、ペリー艦隊の来航などで訪れた幕末の海防危機に際しては、全く用をなさない存在となってしまった。文久二（一八六二）年、幕府が天地丸以下、関船、小早船などを廃船としたのを契機に、軍船の永い歴史に終止符が打たれたが、その後も真鶴の小早船は、時代の変動の中でも生き残った。

日本の風土に根ざして発展した和船であるが、洋船と和船との違いは、洋船は（主にヨーロッパの帆船）は外洋を渡る長距離輸送を目的として開発されたが、和船は日本国内の沿岸輸送を主目的として開発されてきた。また洋船が密封された「樽」であるなら、和船はふたの無い「桶」であり、高波にあうと水船※となる弱点があった。洋船は竜骨に板を張り詰めて造るため細い木材でも大量にあれば造船できる。和船は竜骨が無く、大きな厚い板を大釘で止めて構造する。良材に恵まれた日本ならではの大板を構造にした船である。

軍船と商船との分化方向は進んだが、徳川幕府による諸大名の海軍力を抑制する方向に進むと、商船は発達するものの軍船の発展は止まってしまった。軍事力を誇示するためにしか使えない船を造るより、商船としての機能もある船を造る方が効率が良いというわけである。

近世初期の商品流通は比較的狭い範囲で行われたため、造船技術は地方毎独自の技術を保っていた。当時、各地方で主流をなした大型商船は、どれも四角帆1枚の古典的帆装のため、順風を得ない時は帆を下ろし、櫓で推進するという代物であった。

寛文期（一六一一～七三年）ごろの全国的海運網の整備に伴い、瀬戸内や九州地方の帆走性能を向上させ、ある程度の逆風帆走も可能な帆走専門の近世的商船である弁才船が、他の船種に替わり廻船業の主座についた。十八世紀半ばには商船は弁才船に統一されている。千石船と別称された大型商船がこの弁才船である。昭和初期に機帆船が国内海運の主役につくまで、真鶴の海運業を担った弁才船もこうした中で生まれた。

時代は下り明治時代、政府は国内海運の近代化を意図して大型和船のかわりに洋式帆船を主用しようとしたが成功しなかった。それは弁才船が、船内の二台の轆轤を使って人力で回転させ、綱と滑車で帆柱の立て・倒し作業や舵降ろし、伝馬船や荷物の積み降ろし、

碇の引き揚げまで、何でもこなせる便利な仕掛けをたくさん持っていたからである。

そこで明治二〇（一八八七）年以降は、五〇〇石積み以上の和船の建造禁止に踏み切ったが、現実には和船に洋式帆船の技術取り入れた折衷式の機帆船の全盛期へと移行した。

小型和船は制約外であったため、沿岸漁船として近年まで全国的に使用され姿をとどめたが、これも主流は合成樹脂使用のＦＲＰ（プラスチック）船にとってかわられ、現在は滅亡の状況となっている。

小早船が夏の太陽に映え、また夕闇の水面に浮かぶ美しい姿。現在のような形式の船祭りは、貴船神社の「舟中祈祷」を起こりとして、江戸時代の石材業、廻船業の隆盛から江戸文化の流入もあって形づくられた。元禄時代前後に御座船形式の船祭りになったと思われるが、これは天下泰平の江戸時代、軍船からの転用された大名の御座船を摸して神事に転用したものである。貴船祭りの中心をなす小早船、脈々と人びとによって伝統が受け継がれてきた。時代による変遷もあるが、祭りに対する人びとの熱い思い入れをこれからも大切にしていきたい。

※水船…波をかぶって、船全体が水に浸かってしまった状態になること

貴船まつり小早船 組立図作成について

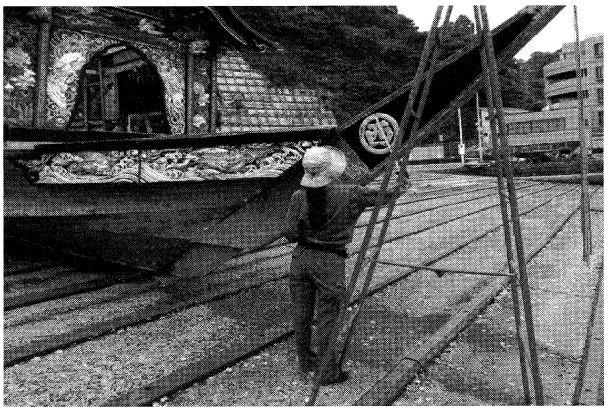
井上　説子
（有限会社 伊藤平左ェ門建築事務所 取締役社長）

「はじめに」

このたび、貴船まつりの中心的役割の東西小早船の組立図作成の業務に関わらせていただいた弊社は、社寺建築や文化財建造物を専門とする設計事務所です。木造船の図面を描くことは初めてで、部材名称を覚えることから始め戸惑うことが多くありましたが、何とか全体形状を図面化することはできても、組立方を伝える説明図作成には非常に苦労しました。というのは大変に巧妙かつ船大工の知恵を駆使して作られていたからです。この貴重な伝統を踏襲する行事の一環にご協力できましたことは、苦労を超えて光栄なことであり、紙面をお借りして感謝申し上げるとともに、本業務を通して学んだことを報告させていただきます。

「概　要」

最初の実測は二年前の梅雨も明けないうちに開始しました。組立作業中の緊張感の漂う中、何度も調査で通いましたが、完成直前というところで台風のために中止になってしまいました。その後は、貴宮丸修理作業場で組立方法など内田工務店棟梁の説明をききながら詳細調査を続け、全容の解明に努めました。部材は、幾度も組立を繰り返しているために摩耗や欠損が著しく、当初形状確認も不明な点を多く残していますが、この船を造った船大工達の工夫の賜物に少しは近づけたと思っております。



小早船を実測する

全国各地に船を象った山車はありますが、ここでは、実際に海に浮かべて曳航まで行い、解体後に潮水に触れた部材を水洗いし、乾燥後に彫刻や彩色がある部材は全て専用箱に格納します。船と提灯や花飾りを除いて部材数は三百を超え、大変な労力を要する作業ですが、集落の豊かさと結束力と海での安全を祈る信仰心があって成し遂げられるものと思われます。屋形部分の部材は漆、岩絵具の彩色、金箔押しなど高価な仕上げが施されているため、部材格納は保存に役立ち、解体することで部材修理が可能になり、安全確認ができます。また、組立・解体に際しての高度な技術の継承にも不可欠です。

「特　徴」

① 部材の入る場所

三百を超える部材は、船自体が三次曲面で造られているため、位置によって少しずつ寸法や傾きが異なってきます。間違えないように、部品番号に相当する番付が振られています。墨書、彫文字に加えて新たにマジックで書かれたものもありました。

さらに間違えやすい部材では、仕口形状を少し変えて、指定位置以外には取り付けられないようになっていました。番付や口伝でも充分でないと判断し、ここまでの手間をかけてミスを防ごうとした先人達の工夫の賜物です。

今回は彫文字を基本とした番号札を各部材に取り付け、解説図面にその番号を記載して場所を指定するよう改善しました。

② 組み立て順序

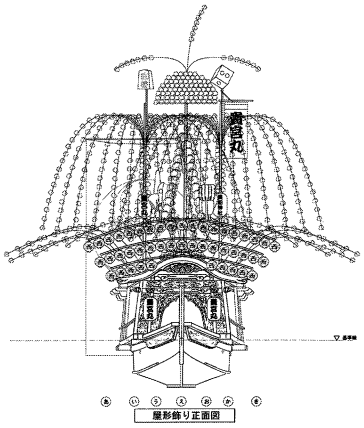
屋形部分は、伝統建築と同様な「建

て込み工法」により、順番通り組立て、最後の部材で固めると一体になって抜け出せなくなります。最後の要となる部材は栓や楔で固めて、鍵のような重要な役割をします。順番を違えるとやり直すしかありません。

さらに難しいのは、フレーム単位に組んでからとか、異種部材を同時に組み入れる等巧妙を極めています。木組パズルのような複雑さですが、実際は理に適っているので、若いうちに体で覚えてしまえば何でもないのかもしれませんが、図や文字で表わすことには苦労しました。

③ 釘やビスを使わない

当たり前のことですが、昔は、金物は大変に貴重であり、後から取り付ける彫刻パネル以外は、継手仕口による固定で組立可能になっています。但し、緩みや揺れもあるので、今回の修理後も紐による固定は必要としています。釘やビスを繰り返し使用すると部材が傷みますので、作業される方は工匠の技をこの機会に会得していただければと思います。



西小早船組立図　真正面

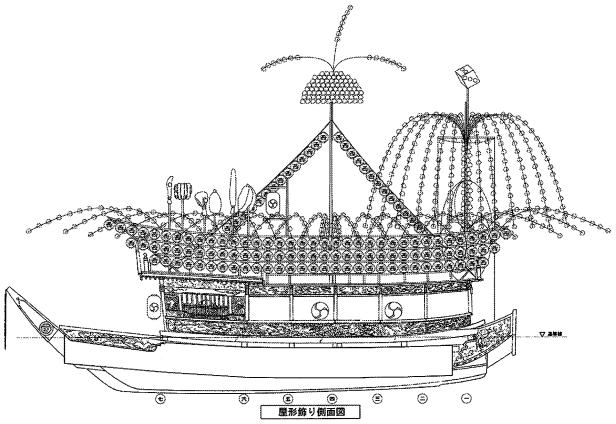
④ 建て方の基準

屋形部分は船の平面形状に合わせているので、中央で膨らみ、柱脚部も舳先から艫への断面曲線にならっているため、水平や垂直に据える部材はありません。さらに柱はそれぞれ異なる傾きがあり、複雑を極めています。そもそも水平垂直基準を守ってという建築の発想でなく、順番通りに前から艫へ（逆も有）組みあげていきます。作業は船自体を港の斜面上に据えて行いますが、この点は、長年の経験が解決しているのでしょう。

⑤ 屋形について

屋形船形式は、参勤交代で藩主が使用した「御座所船」の形式で、関東では、船を参勤交代で使用しないので珍しい形式です。友の部分の長押裏側に朱漆書で弘化二（一八四五）年と塗師の名前が記されていました。当初か修理時かわかりませんが、一七六年前に小田原高梨町在住の仏師が関わっていました。

特に「陳の間」と呼ばれる部分は、非常によい造りで、左右の格子窓も柱の傾きにあわせて微妙に末広がりに加工しています。確定はできませんが、将軍家からの下賜を裏付ける様な上質な仕様になっています。



西小早船組立図　横側

「まとめ」

本来、船大工の方が屋大工より厳しい自然を相手にするため、高度な技術を持っているものとして尊敬されておりました。屋形を解体組立しながら維持していくことは、大変な負担だと思いますが、この船大工の技術の蓄積は、真鶴の誇りと捉えなおして、是非、継承していただきたいと思います。また、高校生等の若い方にも参加していただき、将来を担う方が育つことを願っております。

貴船まつりの各行事の現状

新井　人志
（真鶴町教育委員会　生涯学習係主査）

東西小早船

貴船まつりを華やかに彩る東西の小早船は祭りの中心といえます。

平成五（一九九三）年に欄間彫刻の大規模改修を行いましたが、船の組み立ての基礎となる屋形柱には手がつけられませんでした。そのため長年の祭りでの使用のため劣化が著しく、組立ても危ぶまれるため、令和元（二〇一九）年～三（二〇二一）年の三ヵ年事業で、国、県、町からの補助により屋形柱の全面的改修を行っています。この改修により、屋形柱は元の状態に戻り、釘等を一切使わない、ほぞをかませて組み上げるという従来の形となりました。

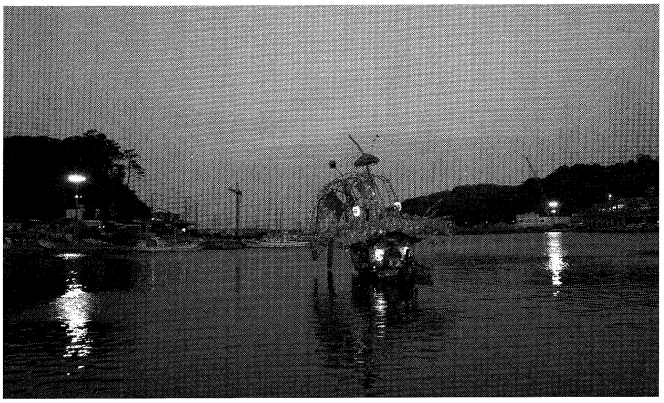
また改修に伴い、正しい組立ての順序、方法が後世に伝わるよう、組立て図面もJRの補助を受けて作成しました。

東西小早船の組立ては、祭りの開催の約二〇日前から始まります。以前は、町民の有志と漁協が作業を行っていましたが、今回の改修を受けて、有志のメンバーによる小早船の保存会が発足しました。また町も全課の職員が交代で、組立て作業に参加しています。

図面の作成により、組立ては土台を

船の上に設置したあと、屋形柱を船の前（舳先）から後（艫）に向かって組立て、それが組み上がったら、その空間に花鳥、鳳龍などの欄間彫刻をはめ込み、屋根や陳の間などが組立てられます。

それらが全てはめ込まれたあと、大吹き流し、船名旗、大鳥毛、槍、熊手、提灯を取り付け、しの花（造花）と提灯で屋根が覆われて、船の中央部に台傘、将棋駒、賽子をつけた長い柱（花幣）を取り付け、また船体の左右に巴紋の描かれた赤色の横幕を廻します。



夜の海上に浮かぶ小早船

東西の小早船は二七日の朝に、保存会の人達により、西、東の順番で海へと入ります（水浮け）が、この時と海上航行時に船が揺らされ、それは災難を防ぐための作法です。小早船は、まつりが終わるまで、海上に浮かび、まつりの夜には、提灯に灯が入れられて、華やかに祭りを彩ります。

舳乗り

東西の小早船が水浮けし、海上を航行中、船の舳先には舳乗りという長老が乗る決まりになっています。

かつては東西小早船の舳乗りは世襲制でしたが、現在は、そういう決まりはなく、貴船まつり奉賛会の役員の中から指名されています。また迎え行事を、舳乗りの自宅で奉賛会の役員が迎えにきて行っていましたが、現在は漁協の二階に場所が変わっています。迎え行事の際に出していた料理も今は出していません。

舳乗りと船頭

舳乗りは、船尾から船首に向かって、左舷中央から乗り込み、降りるときは逆となります。

かつては歌之助と呼ばれる、航行中に船唄を唄う人も乗船していましたが、今は乗っていません、また船を操る船頭は、現在は漁協の関係者がやっていて、航行時の台船につなぐロープ作業、櫂伝馬への指示を行っています。

お囃子

貴船まつりの間、祭りを盛り上げる役目を担うのが、賑やかな音色を奏でるお囃子です。

以前は、神輿船の後に続く囃子船とキリギリス篭と呼ばれた囃子篭がありましたが、今では囃子船と自動車による屋台囃子があります。基本的には、囃子船と屋台囃子は同じ人間が行ないます。また東と西に分かれていて、それぞれ太鼓が一人、小太鼓が三人、大太鼓が一人、笛が一人、鉦が一人の編成となっています。

囃子船の飾りつけは、小早船が柳を立てないと囃子船の柳は立ててはいけないとか、二七、二八日の海上渡御の時には、小早船が定位置につかないと、囃子船も陸（おか）につけてはいけないとか、台船を追い越してはいけないとか多くの決まりごとがあります。

二六日の夜に行われるお天王さんでの鹿島踊が終わったあと、お囃子の奉納が行なわれます。

二七日は、貴船神社から下りてきた神輿が台船に乗せられ、渡御が行なわれる直前に囃子方は車から囃子船に乗り込み、宮司が台船に左足を乗せたら演奏を始めます。町内を回るときは西から動きだします。

かつては、屋台囃子が自分たちの地区をまわるとき、西のときは西が先に、逆に東のときは東が先に回っていました。

二八日の鹿島連と花山車のあいちがいの儀式のときには、東と西は一緒に囃子を行ない、そのときには太鼓をたたきません。祭りの終盤の神送りの際には「聖天（しょうてん）」と呼ばれる囃子を鳴らし

海に浮かぶ囃子船

ながら西の浜へ向かいます。

また祭りの終わりに鹿島連が再び、お天王さんの前で踊りをしたあとに囃子をすることもあります。

花山車・花漕ぎ

まつりの間、色々な飾りつけをして、引いたり、くるくると回ったりして町内を巡る山車のことを花山車といいます。

真鶴では、万燈型の手指しの山車です。屋根の先端には鳳凰が取付けられ、この屋根には五色の蝶が竹ひごに飾られて、花山車を回すときにこれが舞うように見えます。

万燈の各四方には「天下太平」、「家内安全」、「大漁満足」、「海上安全」の文字が書かれています。

花山車は道を払い清める役目がある

真鶴駅前で回る花山車

とされ、神輿などの先立をします。鹿島より先に道を行きます。

現在は、本振りは真鶴の駅前のみで、各辻では辻振りという回数が少ない回りをします。まつりの最中の夕方頃に、花山車をお仮屋に置いたあと、メンバーは、東西の櫂伝馬に移り、花漕ぎ衆として船を漕ぐ役目に変わります。花漕ぎがかつてしていた五色のタスキは、今はしておらず、紫の半纏を着ています。舳頭の大櫂の艪綱は、作りおきをされていて、まつり用の倉庫に入っています。

鹿島踊

鹿島踊は小田原西部から東伊豆の沿岸部にかけて、今に伝えられている神事舞踊です。

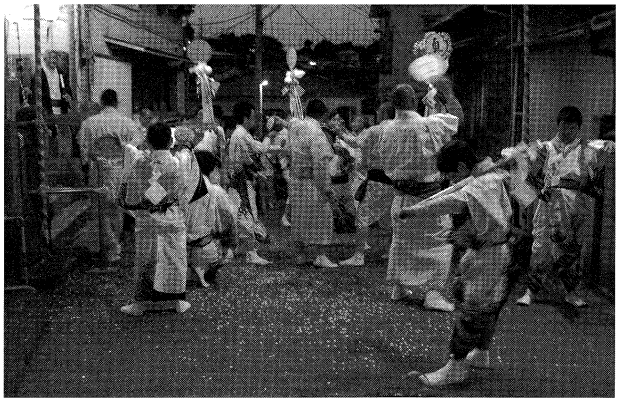
かつては青年団に属する若者の成人の証しとしての踊りでした。今では、まつりの際の奉納の踊りとして伝わっています。

真鶴の鹿島は、世俗化と風流化が強く、小田原の米神や湯河原・吉浜の鹿島踊の白装束に烏帽子という衣装などとは異なり、真鶴の場合は浴衣に色物の手甲、白足袋と団扇です。

彩り物は太鼓、鉦、黄金柄杓、日形、月形という編成で、最初は円形に回って踊り、最後には縦形の列になって踊ります。

歌詞は十二番まであり、踊る場所によっては、それが短縮されて歌われることもあります。

貴船神社やお仮屋、真鶴駅前のほか辻々で踊ります。



お天王さんの前で踊る鹿島連

神　輿

貴船まつりの神輿は保存会のものと神社のものと二体あります。

二七日に発輿の儀式で、宮司が祝詞をあげ、本殿で神輿と保存会三役がお祓いをし、玉櫛を奉納したあと、神輿をかついで境内を右回りに三周したあと、神社の長い急な階段を一気におりていきます。神輿は、境内を回っている間は、下にいる鹿島の人たちには見えてはいけない。祝詞の間も見えてはいけないという決まりがあります。

二八日には両方の神輿は町中を回り、現在は二七日に西の浜、二八日に東の浜に神輿を入れます。

町内を練り歩く本神輿

今回、この文化財だよりにて、貴船まつりの各行事の現状を記録するにあたり、聞き取り調査、資料提供等で次の皆様にご協力いただきました。深く感謝を申し上げます。

貴船神社宮司　平井　義行様
貴船まつり推進本部長　大石　和紘様
神輿保存会　小泉　健　様
鹿島おどり保存会　青木　民雄様
囃子保存会　吉岡　保　様
花漕花山車保存会　吉岡　勇人様
小早船保存会　長谷川勝己様
写真提供　高橋　守　様
川田　絵里様

真鶴町重要伝統文化行事の紹介

真鶴町内には、貴船まつりの他にも一年を通して様々なお祭りがあります。

町では、平成二七（二〇一五）年に真鶴町重要伝統文化行事保護規則を制定し、町のお祭りのいくつかを真鶴町重要伝統文化行事に指定し、町からも補助金を出すなど、その保存と継承に尽力しています。本稿では、その重要伝統文化行事に指定となったお祭りをご紹介いたします。

① 岩兒子まつり

岩兒子まつりは、真鶴町の岩地区にある兒子神社の祭礼です。

この祭りの起源は不明です。昭和二九（一九五四）年に親神輿と子ども神輿が岩漁協より寄贈されたことがきっかけで復活しましたが、昭和三〇年代に入って祭りの中の鹿島踊、花山車、お囃子が消滅しました。昭和五三（一九七八）年に囃子保存会、昭和五七（一九八二）年に花山車保存会、昭和六〇（一九八五）年に神輿保存会が発足して現在の祭りが復活しました。しかし鹿島踊だけは現在もなお途絶えたままとなっています。

岩兒子まつりは、現在、七月十四、十五日に近い土・日曜日に開催されています。十五日の本祭の夕方に二～三度繰り返される本神輿と花山車のぶつかり合いが祭りのクライマックスとなります。

平成二八（二〇一六）年に町の重要伝統文化行事に指定されました。

岩兒子まつり　神輿と花山車のぶつかり合い

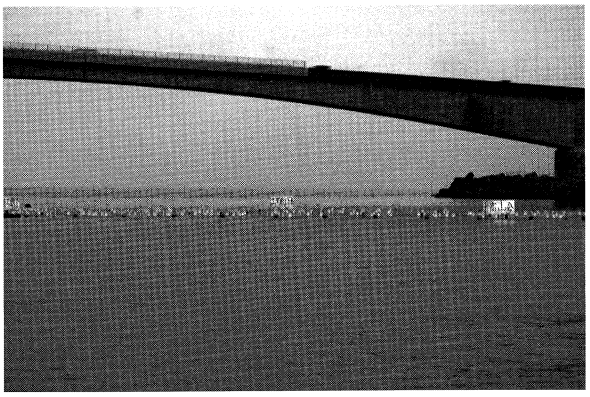
② 岩海岸灯籠流し

岩地区で、過去に行われていたと言われている「しょうろう流し」の行事を、昭和六一（一九八六）年に「岩海岸夏まつり（灯籠流し）」として復活させ、毎年、八月の第一土曜日に岩海岸の砂浜で開催しています。

船で曳行される三基の大灯籠と五〇〇基の灯籠が夕方から、岩の海上に流されて、夜の帳の中、海面に浮かぶ灯籠の風景が幻想的で、単なる夏まつりとは異なる雰囲気が特徴です。

また祭りの最中には、鎮魂のためのご詠歌や嶺南仏教会の僧侶たちによる供養の祈りがささげられます。

平成二九（二〇一七）年に町の重要伝統文化行事に指定されました。



夕暮れの岩海岸に流される灯籠

③ 岩海岸どんど焼き

真鶴町のどんど焼きは、古くは、町内にある十一か所のうちの九か所の道祖神脇で行われていました。

その後、町内は開発、宅地化が進み、どんど焼きを行う場所が減っていき、現在は、岩海岸の一か所のみとなっています。

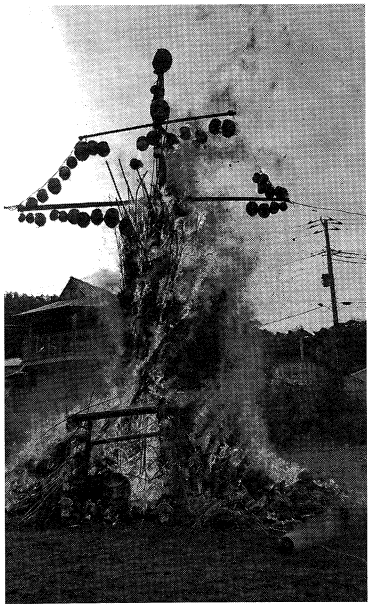
どんど焼きは毎年、一月十五日前後の土曜日もしくは祝日に行われています。

祭りの開催の一週間くらい前から、保存会が中心となって、切り出された竹でやぐらと呼ばれるものを組み上げます。このやぐらの高さは約11mにもなります。組み立てと並行して、各道祖神脇に出された正月飾り等の回収を行い、それをやぐらの中にある空洞部分に収めたり、周囲に飾りつけていきます。

どんど焼き当日は一連の行事の前に、岩のお囃子が子どもたちによって演奏されます。そして時間になると、高学年を中心とした子どもたちが集められて、大人たちが見守る中、一斉にやぐらに点火します。

祭りの最後は、火勢が弱まったやぐらの灰に、三つ又の木の枝に差した団子をくべて焼き、それを帰宅してから家族でその年の無病息災を願って食べます。

当町では唯一行われているどんど焼きでもあることから、令和二（二〇二〇）年に町の重要伝統文化行事に指定されました。



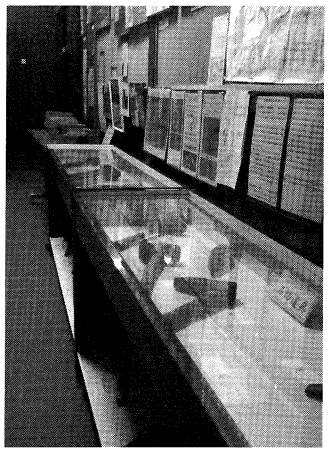
点火されたどんど焼

■真鶴町民俗資料館の紹介

民俗資料館は、昭和六一（一九八六）年に開館いたしました。開館にあたり、元の所有者である土屋家から土地・家屋を無償貸与いただくとともに、多くの美術・工芸品も寄贈いただきました。

現在の民俗資料館は、令和元（二〇一九）年に土地・家屋を購入し、町の所有となりました。家屋は明治二五（一八九二）年に建てられました。関東大震災で被災し、一部を補修しましたが、現在の展示スペースとなっている座敷、廊下は建築時の状態が残っており、歴史的にも貴重なものです。

民俗資料館では、土屋家の家業でもあった石材業に関わる資料や道具をはじめ、著名人の書簡や、美術・工芸品、什器等の土屋家ゆかりの資料を展示しています。展示にあたり、年五回のテーマ展示を実施しています。季節の花を配した庭園も民俗資料館の魅力でもありますので、歴史散策を楽しみながらお立ち寄りください。



展示風景（石材業関係資料）

■文化財審議委員会研修視察報告

国指定重要無形民俗文化財「貴船神社の船祭り」に使用する東西小早船が長年の使用により、屋形柱や欄間彫刻の外枠等の劣化、破損の進み具合が著しいため、令和元年度～三年度の三か年事業で改修を行っています。

当町の文化財審議委員会は、東西小早船の修理委員会のメンバーとして、この改修事業の進捗・管理に携わっており、今年度は次のとおり研修視察を行いました。

【第1回】

- **視察日**　令和2年7月13日（月）
- **視察地**　真鶴町内　貴船神社駐車場倉庫前
- **参加者**　町文化財審議委員4名　事務局（町教育委員会）

事務局の新井より西小早船の各部分の改修内容と各部品及び収納箱への番号札の取付けについて文化財審議委員に説明し、その後十五分ほど、組み上がった西小早船の全体を文化財審議委員が見たあと、さらに改修内容について、個々に確認しました。

改修業者である内田工務店の指導のもと、作成された小早船の組立て図面を見ながら、小早船保存会が西小早船の解体作業を行い、その作業の手順について、文化財審議委員が視察しました。

【第2回】

- **視察日**　令和2年10月1日（木）
- **視察地**　伊勢原市内　有限会社内田工務店作業場
- **参加者**　町文化財審議委員4名　事務局（町教育委員会）

内田工務店の作業場にて、内田社長の案内のもと、東小早船の各部品の現状を確認しました。その後、工務店の広間に場所を移動して修理委員会を開催、改修内容について、内田社長より用意いただいた写真付きの資料を見ながら、どのように修理していくか、各部品それぞれの修理内容を確認しました。

第1回研修会（西小早船組立確認）

令和2年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業

- 文化財だより第三十三号発行

- **町民センター展示事業**
  - 歴史を探る（石器・土器）展　（R2 4／6～5／31）
  - 幼稚園・学校の歴史展　（6／2～7／3）
  - 三宅克己展　（7／7～9／6）
  - 土屋家所蔵名品展　（9／8～11／1）
  - 真鶴の石造物展　（11／3～12／27）
  - 真鶴写真展　（R3 1／5～3／28）

- **民俗資料館展示事業**
  - 端午の節句展　（R2 4／18～5／31）
  - 貴船まつり展　（6／6～8／23）
  - 土屋家書簡展　（8／29～11／23）
  - お正月展　（11／28～R3 1／31）
  - 桃の節句展　（2／6～3／28）

◎文化財保護事業

国指定重要無形民俗文化財

- 貴船神社の船祭り（中止）

町重要伝統文化行事

- 岩兒子まつり（中止）
- 岩地区夏まつり（灯籠流し　中止）
- 岩海岸どんど焼き